

氏名	安藤 耕己
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	博乙第 2919 号
学位授与年月	平成 31年 3月 25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	近現代における青年団の結合原理をめぐる言説とその実態 —青年団論の分析と地域青年団をめぐる社会教育史的研究—

主査	筑波大学准教授	博士（教育学）	上田孝典
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	濱田博文
副査	筑波大学准教授	博士（教育学）	平田諭治
副査	筑波大学准教授	博士（教育学）	國分麻里

### 論文の内容の要旨

安藤耕己氏の博士学位論文は、近現代における青年団の組織化において、いかなる原理によって青年層を結び付けていたかを明らかにしようとするものである。その要旨は以下のとおりである。

#### （目的）

まず著者は、第一に、「弊風」として批判的なまなざしが向けられていた若者組が修養的で中正な「美風」として評価を転じさせることで、青年団はそれを母胎として性格や機能を引き継いで再編されてきたことを明らかにしようとしている。著者は、こうした青年団をめぐる歴史認識を「青年団＝若者組母胎」論と位置づけ、どのような経緯の中で定説化されていったのかを言説分析によって解明を行っている。第二に、戦後に再組織化される青年団が、「やくざ踊り」に代表されるような社交娯楽的な志向性の実態を等閑に付しながら、＜教育的＞なまなざしの中で学習活動を志向する集団として実際とは乖離したイメージが付与されていったことを、青年団指導層のエリートによる言説と地方の勤労青年層の団員というノン・エリートの実態から実証的に明らかにしようとしている。

#### （対象と方法）

第一について、伝統的青年集団を青年団に統合する過程がどのように説明され、「青年」像がどう描かれてきたのかを田沢義鋪、山本瀧之助、熊谷辰治郎ら青年団指導者の著作から検討を行い、とくに「青年団＝若者組母胎」論が定説化されていったプロセスに着目した言説の分析を行っている。第二について、埼玉県旧名栗村の青年会組織である甲南智徳会とその後身である名栗村青年団、岩手県花巻市柵目

青年会を事例に、郷土資料や当時の団員のライフヒストリー研究を手掛かりに在村青年層の日常的な結合原理について考察を行っている。また岩手県旧三陸町浦浜青年会を事例に、「たまり場」である青年会館作りの実践から、施設空間の可能性と限界性の検討を行っている。

### (結果)

第 I 部を構成する第一の課題に対して、著者は田澤義鋪『青年団の使命』（日本青年館、1930）において「青年団＝若者組母胎」論が成立し、『若者制度の研究』（下村虎六郎編、大日本連合青年団、1936）において若者組・若者宿の「教育」化が図られていったと述べている。とくに「弊風」と認識されていた若者組イメージは、日露戦後に「美風」へと転じ、田澤の理想を示した青年団像が「若者組＝青年団」として教化的・修養的で政治的な中立性が強調されたものとして描かれていったことを明らかにしている。その背景には、青年団の軍事利用へ抗するために青年団の自立性を強調しようとしたこと、ファシズム、共産主義からの影響を絶つ思想対策の意図があったと述べている。戦後においても、青年層の左傾化を憂い、脱政治・中正を求める青年団中央組織に関わる人々によって「青年団＝若者組母胎」論は再表出し、「若者／青年」の歴史を管理しようとする指向があったことを明らかにしている。

第 II 部を構成する第二の課題に対して、著者は一般青年団員の結合原理を事例研究から実証を行っている。まず名栗村では、戦前戦後を通じて甲南智徳会（名栗村青年団）と若者組が不可分に併存する二重構造が継続していたことを述べ、日常的な組織の結合原理が「素朴な結合要求」と親密圏への希求にあったこと、また柵目青年会の活動記録をもとに 1960 年頃までの集落青年会の結合原理について、娯楽性と「素朴な結合要求」にあったことを明らかにしている。浦浜青年会の事例においても、外部からの干渉を排除しながら自主・自治的な自由空間としての「たまり場」を求める青年層の「素朴な結合原理」の実態を明らかにしている。

### (考察)

近代において若者集団は青年団として再編され、指導者らによって修養的、中立的な青年像が強調されながら「美風」としての青年団イメージ、つまり「青年団＝若者組母胎」論が形成され、戦後においても引き継がれたことを明らかにしている。しかし実態としては、日常における社交娯楽を志向した「素朴な結合要求」こそが青年団の組織化原理であったと述べている。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本研究は、修養的で中正なイメージが付与された青年団が、「素朴な結合要求」に根ざした青年層の社交娯楽欲から来る組織化原理を捨象しながら構築されてきたことを、青年団指導者の文献にみられる言説分析と日常の青年層の実態に迫る実証的研究によって明らかにしたもので、従来の青年団研究に新しい知見を加えた研究として高く評価される。青年団指導者層の言説のみが扱われている点や「素朴」に内包される具体的な組織化原理が曖昧であるなどの課題も残るが、親密圏への希求に基づく社交や娯楽の重要性が指摘されたことは、現代の若者研究にも示唆を与える今日的意義が認められる。

平成 31 年 1 月 23 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、学力の確認を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。